
特別な思い 後編

ユアサヒトミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別な思い 後編

【著者名】

コアサヒトミ

N6120N

【あらすじ】

前編の続きです。

はてさて、季節は冬となりました。受験の方もかなりヤバす。
ただ今私、山畠卓也は学校の先生に恋をしています。受験シーズン
に何故と思う人も多数だと思います。まあしょうがない。国語の教
師、佐久間明日香に奮闘中だ。

「だから違うつてば。ここは、この文章を捉えればいいの。」

呆ながら明日香先生が言つた。

「分かりません。」

「やる気ある?」

今の俺にどうしようと?

「あんたが教えてつて嘆いてきたから私は帰らないで残つてるの。」「だつて…。」

先生が愛しいんだもん…なんて言えない。不意に思つた。

「先生…。俺が浪人したらどう思う?」

「私としては、嫌だよ。合格して欲しいし。」「何だかほっとした。

「覚えてる?大会の原稿で山畠に行つたこと。」「いろいろ言つてたからな~。」

「いっぱい言つてたから分からないです。」

「あんたに、生徒の合格した時の顔を見るのが嬉しいって。私、山畠にこれを一番伝えたかったんだよ。」「俺に頑張つて欲しいですか?」「当たり前じやん。だから一緒に頑張ろ。」

えつ、一緒に頑張ろうつて事は、一緒にいる時間も増えるじやん。やる氣出てきた。

冬休みになつた。冬休みになると、冬期講習と必勝祈願祭がある。でも今の俺の頭の中は、明日香先生と初詣の正月勤行だ。しかも必勝祈願祭の日は、静岡の富士宮市にいます。必勝祈願祭よりも大事な行事なので…。

「卓也ー。着いたぞ。」

祐太がでかい声を出す。

「正月早々疲れるんですけどー。」

「学校で必勝祈願するよりは良いでしょ。」

今俺は、祐太と一緒に富士宮にある所属寺に向ふ。わざや、うちの学校は宗教法人だからね。

「最近明日香先生どう?」

お決まりの質問じゃん…って笑いながら言つた。

「馬鹿にしないで、少しずつだけ良いで良い方向に進んでると思ひつ。」

「少しだけね。」

絶対馬鹿にしてる…。

「とにかくちゃんと手を合わせよ!。やうでもしないと収穫も明日

香先生も失っちゃうからね。」

「つたぐ、分かったよ。」

一人でお寺内を歩いていると亞由美から電話がかかってきた。

「誰? 亞由美?」

「うん…。ものすゞくつひとつしこ。」

仕方がなく電話に出た。

「もしもし、どうした。」

「どうしたじゃないよ。必勝祈願祭来てないじゃん。」

「えーーーーー。」

「『めん今忙しいから切る。』

ブツツ…。ブーッブーッ。

「もしかして必勝祈願祭来てた?」

「そうみたい。何で?」

「やつぱつ」ち来て良かつたね。」「

「これじゃー本当のストーカーじゃん。」「

亜由美に関しては言葉が出ない。

「どうしたらいいの？ 分からないよ。」「

「とりあえずお寺行こう。少しは気が楽になるよ。」「

そうなれば簡単なんだけど……。嫌な気分で勤行が終わつた。

冬休みが終わつてそろそろセンター入試だ。こんな情緒じや受験どころではない。

久しぶりに部活に行つた。

「どうした山畠？ 珍しいじゃん。さては悩み事でもあるな？」
さすが指導者。手塩にかけてくれただけあるわ。

「センター入試前なので少し原点に戻るといつ意味で……。」「

「1・2年生は外でアップして。」

下級生に向けて言つた。おそらく先生は氣を使つていいのだ。

「明日香先生の事？」「

この際だから思い切つて相談しよう。

「違うんです。亜由美の事です。」「

「別れたくても出来ないんだ。つて顔に書いてある。」「

えつ……。もろばれてる。

「だったらそれをぶつけてみたら。てか、言いたい放題言えばいいじゃん。それで縁を切れ。」「

「……。」「

「後は、お前の強い気持ち次第だ。それだけ鍛えてきたんだろ？ それだけ明日香先生の事が好きなんだろ？」「

そうだ俺は、自分自身に勝つためにここまでやつてきたんだ。

「思い切つて別れを告げる。」「

なんだか気持ちがふつきれた。

「はい、ありがとうございます。頑張ります。」「

俺は、思い切って亜由美のいる大学に行つた。もちろん制服だとまづいから私服に着替えて。とは言つても大学は迫力あるな…。完全敵地じやん。

「あつ、卓也。」

「ちちちちち。」

無言で亜由美のもとに歩いた。

「来てくれたんだね。」

「……。」

「勉強頑張ってる?」

何も言いたくない。

「どうしたの?」

「……無理、もう別れる。」

やつと言えた。問題はこれから。追つて来るか来ないかで亜由美の考えてることが分かる。亜由美の口が動いた。

「……、分かった。」

「じゃあね。」

走つて帰つた。……つて追つて来ないし。“それもどうなの?”つて思つ。けどまあいいや。

センター入試の前日になつた。この日は、センター入試の壮行式だ。これもめんどくさい。式中に何だか物足りない感じがした。式中に祐太が紙を渡してきた。

“この式が終わつたら明日香先生に会いに行つたら”
ナイス。どうせみんな早く帰るんだろうから。

式が終わりみんなが帰つた。そのすきに俺は明日香先生の所に行つた。

「明日香先生ー。」

「お~山畠。センター入試いよいよ明日だね。」

「うん。先生から何か俺に言つて欲しいな。」「何を?」

「先生の力が欲しいし。」「

「ハハハ、分かった。じゃあ、これあげる。」
と言つて先生のシャープペンをくれた。

「何これ?」「

「見れば分かるじゃん、シャープペン。」「

「はい?」「

「はいって何?言葉より良いかなって思つて。特別なんだからね。
どういう意味で特別つて言つてるの?でも嬉しい。

「これ使って頑張つて。」

「うお～～～、気合が入るぞ。」

「先生?俺、先生のために絶対合格してみます。」

明日香先生は自然と笑みを浮かべた。

「先生?卒業したら話したいことがあるんだけど……。」「

「えっ?今じゃ駄目なの?」

「卒業してから、そうじやなければ先生が困るから。」「

「分かつた、待ってるよ。」

そして今日はセンター入試。朝は4時起きです。しかも、クラスメートのみんなは、初日だけ。俺だけ2日目も。何だかんだで初日は終了し、問題の2日目。教科は、生物と数学。

“では始めてください”

わつ分からぬ・・・。でも、明日香先生に貰ったペンがあるから

絶対大丈夫。

最後の科目は、生物だった。最後が簡単で良かつた。すべてを解き終えて少しだけ時間がある。

ふいに俺は明日香先生に貰ったペンを見ていた。何だか明日香先生を思い出して涙が出てきそうになつた。

何でだろ？ 明日香先生に会いたくなつた。ペンからは、暖かい温度りを感じる。

会いたい。試験問題を解き終えた俺は今、明日香先生のことしか頭になかつた。

先生のために受験勉強を頑張つてゐる。そう、先生に1人の男として認めてもらうために . . .

センター入試が終わつた後、所属の寺に行つた。
お寺には、住職さんがいた。

「試験どうだつた？」

「結果は分かりませんが、一応頑張りました。」

「そうか、あんだけ本堂で手を合わせてたもんな。」

おそらくそうゆう意味じや . . .

「頑張つたんだからきっと良いことあるよ。」

「例え好きな人に振られてもですか？」

「うん。」

笑顔で言つてくれた。

俺は、受験が終わり、ひとまず大学にも受かつた。とは言つても滑り止め。そして今日は卒業式。今日、明日香先生に思いを伝えるんだ。悔いを残さないように。つて式中に考へてた。

「早く帰りたい。」

隣に座つている子が俺に言つてきた。誰だつて早く帰りたいよ。

「そういえば、明日香先生は？」

今日に限つて来てないなんて言わないでよ。

「てか俺さつき見かけたよ。」

「まじで、ありがと。」

「何が、ありがとうなの？」

「まあいろいろだ。」

「あつぶねー。」

式が終わって時間があつたので廊下で祐太と話をしてた。

「今日言うんでしょ？心の準備は？」

「うん。大丈夫。」

「本当に今日で最後なんだね。明日香先生とも会えなくなるんだよ」。

「こいつ馬鹿にしてる。」

「からかわないで。」

「でも本当だよ。来年度から明日香先生が学校を移動したらって考えると本気で言つた方が良くなきか。まさに、当たつて砕けろだよ。」

“はーい席につけ”と担任の先生が言つた瞬間に明日香先生が廊下を横切つてたのが見えた。

やつぱり今すぐ会いたい。早く解散して。

こみ上げてくるものが山ほどある。俺は、こんなにも人を好きになつたことがあつただろうか？今まで生きてきた中で一番好きになつた人だ。確信できる。

クラスは解散して俺は、すぐさま明日香先生のもとに向かつた。職員室には、相原先生がいた。

「明日香先生は…、帰つた…。」

「そうですか…。」

嘘だろ、もう会えないなんて…。

「だけど手紙渡してくれつて明日香先生がお前に。」

訳も分からず手紙を読んだ。

“山畠へ。卒業式の今日、私に伝えたいことがあつたんでしょ？でも今日は用事があつて学校に残れません。明日の正午に私の所に来てください。放送部の室内練習場にいます。”

見捨てられてなかつたんだ。

「明日、明日香先生に室内練習場の鍵を渡しておく。協力してやるから、しつかり思いをぶつけてこい。成長したかが試される最後の試練だ。」

そうつ言って相原先生は、職員室を出た。厳しいけど、良い指導者だな。

そして翌日。室内練習場に行つた。そこには、椅子に座つている明日香先生の姿があつた。

心を決めた。

「明日香先生。」

「おはよ。」

「先生、俺さ…明日香先生のことが…好きです。」

「え？」

「佐久間明日香を愛してます。」

間合いかが長い。

「ごめんね、今までそつゆうの考えたことなくつて。別に嫌いって言つてる訳じやないよ。ただ山畠は、18歳じやん。人生これからだし…私の入る余地ないし…。」

完敗だ…。

「でも、気持ちは嬉しいよ。ありがと。」

そう言って俺の唇にキスをした。

「俺、先生が俺のこと必要だつて言つままで待つてます。ずっと。」
何だか泣きそうになつた。泣ぐのをこらえて明日香先生を抱きしめた。

こうして、俺の高校生活は終わつた。

半年後、法龍大佛眼高校の文化祭。

俺と祐太で顔を出しに行つた。

「明日香先生に会えるかね。」

笑顔で祐太に言つた。

「会えるんじゃない。」

と言われたとたん、明日香先生が。

「山煙。」

つて言つて手を振つてくれた。

俺は、笑顔いっぱいに手を振り返してこいつ言つた。

「明日香。」

おしまい。

(後書き)

皆さんには、普通じゃありえない恋をしたことがありますか?・どんな立場であっても、どんなに年齢が離れていても愛する気持ちは一緒にだと思います。視点は、男の子です。ケータイ小説にしては少し珍しいかと。ですが、今好きな人に告白できない男の子。告白する勇気少しあは出たのではないか?・ありますか。ありのままを伝えれば思いも伝わりますよ。

コアサビテ!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6120z/>

特別な思い 後編

2011年12月20日16時53分発行